

『風俗通義』正失篇訳注稿（中）

道家 春代

本稿は、後漢應劭『風俗通義』第二正失篇の訳注の第二報である。（上）は『名古屋女子大学紀要』第五十二号、人文・社会編（二〇〇六年三月）に掲載した。（下）は同第五十三号に掲載予定である。

本文には原則として呉樹平『風俗通義校釋』（天津人民出版社、一九八〇年）を用い、香港中文大學中國文化研究所『風俗通義逐字索引』（香港・商務印書館、一九九六年）、王利器『風俗通義校注』（中華書局、一九八一年）、及び季嘉玲『風俗通義校注』（臺灣師範大學研究所集刊）第二十一號、一九七七年）を参照した。残念ながら朱季海『風俗通義校箋』（學術書林、一九九六年）、趙泓『風俗通義全訳』（貴州人民出版社、一九九八年）は入手できず、見る事ができなかった。

目次

- 5 燕太子丹
- 6 孝文帝
- 7 東方朔
- 8 淮南王安神仙

5 燕太子丹¹

燕太子丹仰嘆，天爲雨粟，烏白頭，馬生角，廚中木象生肉足²，井上株木跳度瀆。

俗説燕太子丹爲質於秦，始皇執欲殺之，言能致此瑞者，可得生活。丹有神靈，天爲感應，於是遣使歸國。謹按太史記³：燕太子丹質秦，始皇遇之益不善，丹恐而亡歸。歸求勇士荊軻、秦武陽，函樊於期之首，貢

督亢之地圖。秦王大悅，禮而見之。變起兩楹之間，事敗而荆軻立死。始皇大怒，乃益發兵伐燕。燕王走保遼東，使使斬丹謝秦，燕亦遂滅。丹畏死逃歸耳，自爲其父所戮，手足圯絕，安在其能使雨粟其餘云云乎。原其所以有茲語者，丹實好士，無所愛恠也，故閭閻小論飭成之耳。

〔注〕

- 1 原題は「燕太子丹仰嘆，天爲雨粟，烏白頭，馬生角，廚中木象生肉足，井上株木跳度瀆」であるが、『逐字索引』に従い、標題を「燕太子丹」と改め、原題を本文中の文とする。吳樹平の云うようにおそらく「俗説」中の文がまぎれたのであろう。今これにしたがって訳す。『論衡』感虛篇も此の事を取り上げている。『史記』刺客列傳「太史公曰世言荆軻，其稱太子丹之命。天雨粟，馬生角也，太過。」また撰者不詳の古小説『燕丹子』に「燕太子丹質於秦，秦王遇之無禮，不得意，欲求歸。秦王不聽，謬言曰令烏白頭、馬生角，乃可許耳。丹仰天歎，烏即白頭，馬生角。秦王不得已而遣之」という。
- 2 『風俗通義』祀典篇「縣官常以臘除夕飾桃人，垂葦茭，畫虎於門，皆追效於前事，冀以禦凶也。」「木象」とはこの「桃人」のことか。

3 刺客列傳。

〔訓読〕

燕太子丹仰嘆するや、天爲に粟を雨らし、烏頭を白くし、馬角を生やし、廚中の木象肉足を生やし、井上の株木瀆を跳度す。

俗説にいふ、燕太子丹秦に質とせられ、始皇執へて之を殺さんと欲し、能く此の瑞を致さば、生活するを得可しと言ふ。丹に神靈有りて、天爲に感應す。是に於て遣りて歸國せしむ、と。

謹んで按ずるに、太史記にいふ、燕太子丹秦に質たるに、始皇之を遇すること益ます不善なれば、丹恐れて亡歸す。歸りて勇士の荆軻と秦武陽とを求め、樊於期の首を函し、督亢の地圖を貢がしむ。秦王大いに悦び、禮して之に見ゆ。變兩楹の間に起き、事敗れて荆軻立ちどころに死す。始皇大いに怒り、乃ち益ます兵を發して燕を伐たしむ。燕王走りて遼東を保ち、使をして丹を斬り秦に謝せしむるも、燕亦た遂に滅ぶ、と。丹死を畏れて逃歸するのみ。自ら其の父の戮する所と爲り、手足圯絶す。安んぞ其の能く粟を雨らしめ、其餘云云のことが在らんや。其の茲の語の有る所以を原めれば、丹實に士を好み、愛恠する所無ければ、故に閭閻の小論之を飭成するのみ。

〔現代語訳〕

俗説に次のように云う。

燕の太子丹が天を仰いで嘆くと、天は彼のために、粟を降らし、カラスの頭を白に変え、馬に角を生やし、厨房に置かれた木像に本物の人の足を生やし、井戸の傍らの木に溝を跳び越えさせた。燕の太子丹が秦の人質となったとき、始皇は彼を捕らえて殺そうとし、これらの瑞祥を起こせたら生かしてやるといった。丹には靈妙な力があつたので、天はそれに感応しこれらの瑞祥を起こして、丹を燕に帰国させてやつたのである。

謹んで考究いたします。

『史記』には「燕の太子丹が秦の人質となると、始皇帝は彼の待遇をますます悪くしたので、丹は恐れて燕に逃げ帰った。帰国すると勇士の荊軻と秦武陽を招き、箱につめた樊於期の首と督亢の地図を貢がせた。秦王は大いに悦んで、賓客を迎える札を整えて彼らに会った。荊軻は二本の柱の間で秦王に襲いかかったが、失敗しその場で殺された。始皇帝は激怒し、兵を増強し燕を討った。燕王は遼東に逃れ守り、使いを送って丹を斬り、秦に詫びを入れさせたが受け入れられず、燕は結局滅ぼされてしまった」とある。

丹は殺されるのを恐れて秦から逃げ帰っただけな

のである。そして自分の父に殺され、手足は首から切り離されてしまった。そんな彼に粟を降らす等々を引き起こすような力があるはずがない。俗説のようなことが語られるようになった原因を探ってみると、丹は実に士を好み厚遇したため、世間によい評判がたちこのような粉飾した説が作られたのだ。

6 孝文帝¹

孝成皇帝²好詩書、通覽古今、閑習³朝廷儀體、尤善漢家法度故事。常見中壘校尉⁴劉向、曰：「世俗多傳道孝文皇帝、小生於軍、及長大有識、不知父所在、日祭於代東門外。高帝數夢見一兒祭已、使使至代求之、果得文帝、立爲代王。及後徵到、後期不得立、日爲再中。及即位爲天子、躬自節儉、集上書囊以爲前殿帷⁵、常居明光宮、聽政。爲皇太后持三年服、廬居枕塊如禮⁶、至以發大病、知後子不能行三年之喪、更制三十六日服⁷。治天下致升平、斷獄三百人⁸、粟升一錢、有此事不。」

向對曰：「皆不然。謹按¹⁰漢高三年、魏王豹叛漢附楚、漢使大將韓信擊虜豹姬薄夫人、傳詣雒陽織室。漢

王見薄姬，內後宮幸之，生文帝¹¹。二年而爲王者子，常居宮闕內，不棄捐軍中，祭代東門。高皇后八年後九月己酉夕即位，就未央，幸前殿，下赦令¹²。即位時以昏夜，日不再中。文帝雖節儉，未央前殿至奢，雕文五采，盡華棖璧璫，軒檻皆飾以黃金¹³，其勢不可以書囊爲帷。奢儉好醜，不相副伴。又文帝以後元年六月己亥崩未央宮¹⁴，在時平常聽政宣室¹⁵，不居明光宮¹⁶。及皇太后以孝景二年四月壬子薨，葬南陵。文帝先太后崩，不爲皇太后持三年服。文帝遵漢家基業初定，重承軍旅之後，百姓新免於干戈之難。故文帝宜因修秦餘政教，輕刑事少，與之休息，以儉約節欲自持。初開籍田，躬勸農耕桑，務民之本¹⁷。即位十餘年，時五穀豐熟，百姓足，倉廩實，蓄積有餘。然文帝本修黃老之言，不甚好儒術，其治尙清淨無爲¹⁸，以故禮樂庠序¹⁹未修，民俗未能大化，苟溫飽完給，所謂治安之國也。其後匈奴數犯塞，侵擾邊境²⁰。單于深入寇掠，賊害北地都尉，殺略吏民，係虜老弱，驅畜產，燒積聚，候騎至甘泉，烽火通長安，京師震動，無不憂懔。是時大發興材官騎士十餘萬軍長安²¹。帝遣丞相灌嬰擊匈奴，文帝自勞兵至太原、代郡²²。由是北邊置屯待戰，設備備胡，兵連不解，轉輸駱驛，費損虛耗。因以年歲不登，百姓饑乏，

穀糶常至石五百，時不升一錢。前待詔賈捐之爲孝元皇帝言：『太宗時民賦四十，斷獄四百餘²³。』案太宗時民重犯法，治理不能過中宗²⁴之世，地節元年，天下斷獄四萬七千餘人，如捐之言復不類，前世斷獄皆以萬數，不三百人。文帝即位二十三年，日月薄蝕²⁵，地震動，毀壞民廬舍，關東二十九山同日崩，潰水出²⁶，河決酸棗²⁷，大風壞都²⁸，雨雹如桃李，深者厚三尺，狗馬及人皆生角²⁹，大雪³⁰蝗蟲³¹。文帝下詔書曰：『間者陰陽不調，日月薄蝕，年穀不登，大遭旱蝗饑饉之害，謫見天地，災及萬民。丞相、御史議可以佐百姓之急³²。』推此事類，似不及中宗之世，不可以爲升平。』

〔注〕

1 在位前一八〇—一五七。この項、長いので三段に分ける。

2 在位前三三—七。

3 『詩經』大雅卷阿「君子之馬，既閑且馳」鄭玄箋「閑，習也。」

4 『漢書』百官公卿表上「中壘校尉掌北軍壘門內，外掌西域。」

5 『史記』孝文本紀「上常衣絺衣，所幸慎夫人，令衣不得曳地，幃帳不得文繡，以示敦朴，爲天下先。」

また『漢書』東方朔傳「朔對曰：願近述孝文皇帝之時，當時耆老皆聞見之。貴爲天子，富有四海，身衣弋綈，足履革舄，以韋帶劍，莞蒲爲席，兵木無刃，衣赆無文，集上書囊以爲殿帷。」「前殿」は未央宮の前殿。

6 注16参照。

7 『儀禮』既夕禮「居倚廬，寢苦枕塊。」

8 孝文本紀「遺詔曰：服大紅十五日，小紅十四日，織七日，釋服」集解引應劭曰「紅者，中祥大祥以紅爲領緣也。織者，禫也。凡三十六日而釋服。」「後子」は嫡子。

9 『論衡』藝增篇「光武皇帝之時，郎中汝南賁光上書

言，孝文皇帝時，居明光宮，天下斷獄三人。」

10 原本、『索引』、王利器は「謹按」で段をかえるが、吳樹平は「謹按」を後人の挿入とし「謹按」以下も劉向の語とする。これに従う。

11 『史記』外戚世家、『漢書』外戚傳に詳しい。

12 『漢書』文帝紀「閏月己酉，入代邸。：遂即天子位。群臣以次待。使太僕嬰、東牟侯興居先清宮，奉天子法駕迎代邸。皇帝即日夕入未央宮。：還坐前殿，下詔。」

13 『三輔黃圖』卷二「漢宮に「未央宮，漢書曰高祖七年，

蕭何造未央宮，立東闕、北闕、前殿、武庫、太倉。上見其壯麗太甚，怒。：未央宮周迴二十八里，前殿東西五十丈，深十五丈，高三十五丈。營未央宮因龍首山以制前殿。至孝武以木蘭爲芬檉，文杏爲梁柱，金鋪玉戶，華棖璧璫，雕楹玉碣，重軒縷檻，青瑱丹墀，左城右平，黃金爲壁帶，間以和氏珍玉，風至其聲玲瓏然也」とあり、このように飾り立てたのは武帝と云う。

14 孝文本紀「後七年六月己亥，帝崩於未央宮。」

15 『三輔黃圖』卷三「未央宮「宣室、溫室、清涼，皆在未央宮殿北。：宣室殿，未央宮前殿正室也。淮南子曰周武王殺紂於宣室。漢取舊名也。漢書曰文帝受釐宣室，夜半前席賈生，問鬼神之事，即此也。」『漢書』賈誼傳「文帝思誼，徵之。至，入見，上方受釐，坐宣室。上因感鬼神事，而問鬼神之本。誼具道所以然之故。」

16 『漢書』武帝紀「太初四年秋，起明光宮。」『三輔黃圖』卷三「北宮「明光宮，武帝太初四年秋起，在長樂宮後，南與長樂宮相連屬。」文帝の時はまだ明光宮はなかった。

17 文帝紀「二年春正月丁亥，詔曰夫農，天下之本也，其開籍田，朕親率耕，以給宗廟粢盛。」同食貨志上

によれば「開籍田」は賈誼の進言による。「文帝即位、躬修儉節、思安百姓。時民近戰國、皆背本趨末、賈誼說上曰：。於是上感誼言、始開籍田、躬耕以勸百姓。」

18 『史記』禮書「孝文即位、有司議欲定儀禮、孝文好道家之學、以爲繁禮飾貌、無益於治、躬化謂何耳、故罷去之。」

19 「庠」「序」は學校。『孟子』滕文公章句上「設爲庠序學校以教之。庠者養也、校者教也、序者射也。夏曰校、殷曰序、周曰庠。」

20 孝文本紀、文帝紀、匈奴傳によれば、文帝時代、匈奴の大規模な侵入は三年、十四年、後六年の三度あった。

21 『漢書』匈奴傳上「孝文十四年、匈奴單于十四萬騎入朝那蕭關、殺北地都尉卬、虜人民畜產甚多、遂至彭陽。使騎兵入燒回中宮、候騎至雍甘泉。於是文帝：發車千乘、十萬騎、軍長安旁以備胡寇。：大發車騎往擊胡。單于留塞內月餘、漢逐出塞即還、不能有所殺。匈奴日以驕、歲入邊、殺略人民甚衆、雲中、遼東最甚、郡萬餘人。漢甚患之、乃使使遺匈奴書、單于亦使當戶報謝、復言和親事」(文帝後六年)匈奴復絕和親、大入上郡、雲中各三萬騎。

所殺略甚衆。於是漢使三將軍屯北地、代屯句注、趙屯飛狐口、緣邊亦各堅守以備胡寇。又置三將軍、軍長安西細柳、渭北棘門、霸上以備胡。胡騎入代句注邊、烽火通於甘泉、長安。數月、漢兵至邊、匈奴亦遠塞、漢兵亦罷。後歲餘、文帝崩。」

22 匈奴傳上「至孝文即位、復修和親。其三年夏、匈奴右賢王入居河南地爲寇、於是文帝下詔曰：其發邊吏車騎八萬詣高奴、遣丞相灌嬰將擊右賢王。右賢王走出塞、文帝幸太原。是時、濟北王反、文帝歸、罷丞相擊胡之兵。」

23 文帝、在位前四九(前三三)。太宗は文帝的廟号。

『漢書』嚴朱吾丘主父徐嚴終王賈傳下「賈捐之字君房、賈誼之曾孫也。元帝初即位、上疏言得失、召待詔金馬門。：捐之對曰：至孝文皇帝、閔中國未安、偃武行文、則斷獄數百、民賦四十、丁男三年而一事。：故諡爲孝文、廟稱太宗。至孝武皇帝：則天下斷獄萬數、民賦數百。』『漢書』刑法志「至孝文即位：刑罰大省、至於斷獄四百、有刑錯之風。」

24 宣帝の廟号、在位前七四(前四九)。

25 『漢書』五行志下之下には、文帝的時代、日食は二年十一月癸卯晦、三年十月丁酉晦、同十一月丁卯

晦、後四年四月丙辰晦、後七年正月辛未朔の五回が記録されている。

- 26 文帝紀「元年四月、齊楚地震、二十九山同日崩、大水潰出。」師古曰「旁決曰潰、上湧曰出。」「五年春二月、地震。」

- 27 『漢書』溝洫志「漢興三十有九年、孝文時河決酸棗、東潰金隄、於是東郡大興卒塞之。」

- 28 五行志下之上「文帝二年六月、淮南王都壽春大風毀民家、殺人。…文帝五年、吳暴風雨、壞城官府民室。…五年十月、楚王都彭城大風從東南來、毀市門、殺人。」

- 29 五行志中之上「文帝後五年六月、齊雍城門外有狗生角。」五行志下之上「文帝十二年、有馬生角於吳、角在耳前、上鄉。右角長三寸、左角長二寸、皆大二寸。」

- 30 五行志中之下「文帝四年六月、大雨雪。」

- 31 文帝紀「後六年夏四月、大旱、蝗。」

- 32 文帝紀に載せる後元年の詔。文はかなり異なっている。

〔訓読〕

孝成皇帝詩書を好み、古今を通覽し、朝廷の儀體に閑習し、尤も漢家の法度故事を善くす。常て中壘校尉劉向に見えて曰く、「世俗多く傳へて道ふ、孝文皇帝、小くして軍に生じ、長大して識有るに及び、父の在る所を知らず、日に代の東門の外に祭る。高帝數しば夢に一兒の己を祭るを見て、使をして代に至り之を求めしめ、果して文帝を得、立てて代王と爲す。後徵されて到るに及び、期に後れ立つを得ざるに、曰爲に再び中す。即位して天子爲るに及び、躬自ら節儉し、上書の囊を集め以て前殿の帷と爲す。常に明光宮に居りて聽政す。皇太后の爲に三年の服を持し、廬居枕塊すること禮の如くし、以て大病を發するに至り、後子三年の喪を行ふ能はざるを知り、制を三十六日の服に更む。天下を治めて升平を致し、斷獄三百人、粟升一錢なり、と。此事有りやなしや」と。

向對へて曰く「皆然らず。謹んで按ずるに漢の高三年、魏王豹漢に叛き楚に附く。漢大將韓信をして撃ち豹の姫薄夫人を虜へしめ、雒陽の織室に傳詣す。漢王薄姫を見て、後宮に内れ之を幸し、文帝を生む。二年して王者の子と爲り、常に宮闕の内に居れば、軍中に棄捐せられ、代の東門に祭らず。高皇后八年後九月己酉夕即位し、未央に就き、前殿に幸し、赦令を下す。即位の時は昏夜を以てすれば、日は再中せず。文帝節儉すと雖も、未央の前殿至奢、雕文五采、盡く華棖壁

璫、軒檻皆飾るに黄金を以てすれば、其の勢ひ書囊を以て帷と爲すべからず。奢と儉、好と醜とは、相副伴せず。又文帝後元年六月己亥を以て未央宮に崩じ、在りし時平常宣室に聽政し、明光宮に居らず。皇太薄后孝景二年四月壬子を以て薨するに及び、南陵に葬らる。文帝太后に先んじて崩すれば、皇太薄后の爲に三年の服を持せず。文帝漢家の基業初めて定まるに遵ひ、重ねて軍旅の後を承け、百姓新たに干戈の難を免る。故に文帝因りて秦餘の政教を修め、刑を軽くし事少く、之に休息を與へ、儉約節欲を以て自ら持すを宜とし、初めて籍田を開き、躬ら農耕桑を勸め、民の本を務めしむ。即位して十餘年、時に五穀豐熟し、百姓足り、倉廩實ち、蓄積餘り有り。然して文帝本より黄老の言を修め、甚しくは儒術を好まず、其の治清淨無爲を尙ぶ。以ての故に禮樂庠序未だ修めず、民の俗未だ大いに化する能はざるも、苟くも溫飽完給なれば、所謂治安の國なり。其の後匈奴數しば塞を犯し、邊境を侵擾す。單于深く入りて寇掠し、北地都尉を賊害し、吏民を殺略し、老弱を係虜し、畜産を驅り、積聚を燒く。候騎甘泉に至り、烽火長安に通ず。京師震動し、憂懣せざるは無し。是の時大いに材官騎士十餘萬を發興し長安に軍す。帝丞相灌嬰をして匈奴を撃たしめ、文帝

自ら兵を勞ひ太原と代郡とに至る。是れ由り北邊に屯を置き戰を待ち、備を設けて胡に備ふ。兵連なりて解けず、轉輸駱驛し、費損虛耗す。因りて年歲登らざるを以て、百姓饑乏し、穀糴常に石五百に至れば、時に升一錢ならず。前の待詔賈捐之孝元皇帝の爲に言ふ、『太宗の時民賦四十、斷獄四百餘』と。案ずるに太宗時民法を犯すを重んずるも、治理は中宗の世を過ぐるに能はず。地節元年、天下の斷獄四萬七千餘人、捐之の言の如きは復た類ならず。前世の斷獄皆萬を以て數ふるに、三百人ならじ。文帝即位して二十三年、日月薄蝕し、地數しば震動し、民の廬舍を毀壞し、關東の二十九山同日に崩れ、潰えて水出で、河酸棗に決れ、大風都を壞し、雹の桃李の如き雨り、深きこと厚三尺、狗馬及び人皆角を生じ、大雪蝗蟲あり。文帝詔書を下して曰く『間者陰陽不調、日月薄蝕し、年穀登らず、大いに旱蝗饑饉の害に遭ひ、謫天地に見れ、災萬民に及ぶ。丞相御史議して以て百姓の急を佐くべし』と。此れを事類に推しはかるに、中宗の世に及ばざるが似く、以て升平と爲すべからず』と。

〔現代語訳〕

前漢の孝成帝は『詩經』『書經』を好み、古今の書物を通覽し、朝廷の儀禮制度に習熟し、中でも漢朝の

法制や事例を熟知していた。かつて中壘校尉の劉向に会ったおりに尋ねた、「俗世間に伝えるところによれば、孝文皇帝は子供のところ軍中で育ち、成長して物心がつくと、父がどこにいるかわからないので、毎日代の城まちの東門の外で父を祭っていた。父高祖皇帝はしばしば子供が自分を祭っている夢をみ、使いを送ってこの子供を捜せると、案の定文帝が見つかり、代王に立てた。のち朝廷に徴めされて京師みやこに到着はしたものの期限に遅れ即位できなくなってしまうが、王のために太陽が戻って再び南中したため即位できた。天子となると自ら率先して節儉にはげみ、上書が入れてあった布袋を集めて前殿の帷帳を仕立てた。常に明光宮に居て政務を執った。母薄皇太后のために、礼の定めるとおり、陵墓に粗末な小屋を立てその中で土くれを枕にして三年の喪に服したところ大病にかかってしまい、このことから嫡子が三年の喪に服すのは不可能と知り、服喪の期間を三十六日にするよう制度を改めた。天下を治めて升平の世を招き、罪を裁いたのはたったの三百人、物価は安定し粟は一升一錢だった、というが、これらは本当のことであろうか。」

劉向は答えて云った、「皆違います。（謹んで考えますに）漢の高祖三年に、魏王豹が漢に叛き楚につき

ました。漢は大將軍韓信に豹を討たせ、豹の姫である薄夫人を捕虜とし雒陽に護送させ織物部屋に入れました。漢王は薄姫を見て後宮に入れいづくしみ、文帝が生まれました。文帝は二年で王者の子と認められ常に宮殿内に居住していたので、軍中に捨てられることなく、代の東門で父を祭ることもありませんでした。

文帝は呂太后の八年後九月己酉の夜即位し、未央宮に入り、前殿に赴き大赦の令を下されました。即位の間は夜暗い時であり、太陽がもどって再度南中するということはありませんでした。文帝は儉約に努めていたとはいえ、未央宮の前殿は豪者を極め、五色の彫刻が施され、垂木はすべて彫刻と玉で飾られ、欄干は黄金で飾られていたのですから、その勢いからして上書を入れた布袋で帷帳をつくることなどありません。豪奢と儉約、美と醜とが共存することはないのです。

また、薄皇太后は孝景帝の二年四月壬子に薨去し（文帝の霸陵近くの）南陵に葬られました。文帝は薄太后より前に崩御したのですから、薄太后の為に三年の喪に服することはできません。文帝は基礎が固まったばかりの漢王朝を継承し、たび重なる戦争の後を承け、人民は戦乱による難をやつと免れたばかりでありました。そのため文帝は秦以来の政治と教化を修正し、刑

を軽くし事業を少なくし、人民に休息を与えるべきだと考え、儉約節欲によって自ら律し、初めて籍田を開き、自ら率先して農耕養蚕することによって、民に農業という本業に務めるよう勧めました。即位して十年余りはいつも五穀豊作で、民の食料は足り、穀倉は満ちて、あり余るほど貯蔵されていました。しかしながら文帝はもともと黄老の学を修めており、それほど儒学を好まず、治世は簡明無為を重んじました。そのため礼楽や学校は設けられず、民の風俗は大いに教化されるには至りませんでした。が、まあなんとか民は衣食住が足りていましたから、治安の国といえましょう。その後、匈奴がしばしば辺塞を襲い侵略するようになり、單于が中国に深く侵入し略奪し、北地都尉を殺し、吏民を殺害し、年寄りも若者も捕虜にし、家畜を駆り立てて奪い、貯蔵していた食料を焼きました。斥候の騎兵が甘泉にやってきて、急を知らせる烽火が長安まで届きました。京師は動揺し、憂慮しないものはいませんでした。このとき、地方守備兵や騎兵十万余を徵発し長安に軍をおき、丞相の灌嬰を派遣して匈奴を討たせ、文帝自ら太原と代郡に兵を労いに赴きました。それ以来北方の辺境に守備兵を置き臨戦態勢をしき、胡の侵入に備えました。兵は連年退くことはできず、

輜重の輸送は延々と続き、戦費を消耗しました。さらに穀物の不作のため、人民は食糧不足で餓え、穀物の買入価格は一石（百升）五百錢に高騰したのですから、その当時一升一錢ということはありません。先の待詔賣捐之は文帝の下問に『太宗（文帝）の時代民の賦役は一年に四十日、裁判は四百余りでした』と答えました。考えてみますに、太宗の時代、民は法を犯すことを重大に考えていましたが、太宗の治政は文帝の前の中宗（宣帝）の時代に優るものではありません。その中宗の地節元年（前六九）ですら、天下で裁判を受けたものは四万七千人余りですので、捐之の言は当てになりません。前時代の裁判数はすべて万単位に上るのに、三百人ということはありません。文帝の在位二十三年間に、日食月食もあり、しばしば地震が発生して民の住居を破壊し、関東では二十九の山が一日のうちに崩れ、堤防が潰れ洪水が起りました。また黄河が東郡の酸棗で決壊し、大風が各国の都を襲って破壊し、桃李の実ほどの雹が降って三尺余りに積もり、大や馬、人に角が生えたり、夏に大雪が降ったり蝗が発生したりという災異が相次ぎました。文帝はそのため『近頃陰陽の調和がくずれ、日月食が起こり、穀物が稔らず、日照り蝗飢饉の害に遭っている。私の悪政

の罪が天地に現れ、そのため災害が万民に及んでいる。丞相と御史は人民の窮乏を救う法を議論せよ』と詔を下しました。これらの事から推測致しますに、中宗の世にも及ばないようなので、文帝の世を升平ということとはできません。」

上曰：「吾於臨朝統政施號令何如。」向未及對，上謂向：「校尉帝師傅，耆舊洽聞，親事先帝，歷見三世得失¹。事無善惡，如聞知之，其言勿有所隱。」向曰：「文帝時政頗遺失，皆所謂悔慙小疵耶。嘗輦過郎署，問中郎馮唐²以趙將廉頗、馬服³，唐言：『今雖有此人，不能用也。』推輦而去，還歸禁中，召責讓唐⁴。唐頓首陳言：『聞之於祖父，道廉頗、李牧爲邊將，市租諸入皆輸莫府，而趙王不問多少。日擊牛灑酒，勞賜士大夫，賞異有故，能立威名⁵。今臣竊聞雲中太守魏尚，邊之良將也。匈奴常犯塞爲寇，尚追之，吏士爭居前，樂盡死力。斬首上功，誤差數級，下之吏，尚竟抵罪。由是言之，雖得廉頗、李牧，不能用也。』及河東太守季布。治郡有聲，召欲以爲御史大夫。左右或毀言使酒⁷，後不用，布見辭去，自陳曰：『臣幸得待罪河東，無故而見徵召，此人必有以臣欺國者；既到無用，此人

亦有以毀傷臣者。今以一人言則進之，以一人言則退之，臣恐天下有以見朝廷短也。』上有慚色，卒遣布之官。及太中大夫鄧通⁸以佞幸吮癰瘍膿汁見愛，擬於至親，賜以蜀郡銅山，令得鑄錢，通私家之富，侔於王者，封君。又爲微行，數幸通家。文帝代服衣闕，襲氈帽，騎駿馬，從侍中、近臣、常侍、期門⁹。武騎獵漸臺¹⁰下，馳射狐兔，果雉刺處。是時，待詔賈山¹¹諫，以爲不宜數從郡國賢良吏出遊獵，重令此人負名不稱其與。及太中大夫賈誼亦數陳止遊獵¹²。是時，誼與鄧通俱侍中同位，誼又惡通爲人，數廷議之，由是疏遠，遷爲長沙太守¹³。既之官，內不自得。及渡湘水，投吊書曰：『閹茸尊顯，佞諛得意¹⁴。』以哀屈原離讒邪之咎，亦因自傷爲鄧通等所愆也。」

〔注〕

1 劉向は宣帝、元帝、成帝の三代に仕えた。

2 『史記』張釋之馮唐列傳「馮唐者，其大父趙人。父徙代。漢興徙安陵。唐以孝著，爲中郎署長，事文帝。」

3 『史記』廉頗藺相如列傳「廉頗者，趙之良將也。趙惠文王十六年，廉頗爲趙將伐齊，大破之，取陽晉，拜爲上卿，以勇氣聞於諸侯。：趙奢者，趙之田部吏也。：平原君以爲賢，言之於王。王用之治

國賦、國賦太平、民富而府庫實。秦伐韓、軍於闕與。：王乃令趙奢將，救之。：趙奢縱兵擊之，大破秦軍。秦軍解而走，遂解闕與之圍而歸。趙惠文王賜奢號爲馬服君。：趙奢於是與廉頗、藺相如同位。」張釋之馮唐列傳『漢書』張馮汲鄭傳にはともに「馬服」ではなく「李牧」の名を挙げている。

4 張釋之馮唐列傳「上既聞廉頗、李牧爲人，良説，而搏髀曰嗟乎，吾獨不得廉頗、李牧時爲吾將，吾豈憂匈奴哉。唐曰主臣，陛下雖得廉頗、李牧，弗能用也。上怒，起入禁中。良久，召唐讓曰公奈何衆辱我，獨無閒處乎。唐謝曰鄙人不知忌諱。當是之時，匈奴新大入朝那，殺北地都尉印。上以胡寇爲意，乃卒復問唐曰公何以知吾不能用廉頗、李牧也。唐對曰：。」

5 廉頗藺相如列傳「李牧者，趙之北邊良將也。常居代鴈門，備匈奴。以便宜置吏，市租皆輸入莫府，爲士卒費。日擊數牛饗士，習射騎，謹烽火，多閒諜，厚遇戰士。：李牧多爲奇陳，張左右翼擊之，大破殺匈奴十餘萬騎。滅襜褕，破東胡，降林胡，單于奔走。其後十餘歲，匈奴不敢近趙邊城。」

6 楚の人で、任侠をもつて名声があつた。項羽の下ではしばしば高祖をくるしめたので、項羽が滅んだ

後お尋ね者となつたが、濮陽の周氏、魯の朱氏らの計略により赦され、郎中に任じられ、文帝の時河東太守となつた。『史記』季布欒布列傳『漢書』季布欒布田叔傳に此の事を載せる。

7 季布欒布田叔傳「人又言其勇，使酒難近。」應劭曰「使酒，酗酒也。」師古曰「言因酒霑洽而使氣也。近謂附近天子爲大臣也。」

8 もと黃頭郎（未央宮内の池の船頭。注10参照）として仕えていた。文帝が天に上る夢をみ、夢の中から尻を押し上げてくれた人物に彼が似ていたことから寵愛されるようになった。『史記』佞幸列傳『漢書』佞幸傳に伝がある。

9 『漢書』百官公卿表上「郎中令，秦官，掌宮殿掖門戶，有丞。武帝太初元年更名光祿勳。：期門、羽林皆屬焉。：期門掌執兵送從，武帝建元三年初置，比郎，無員，多至千人。」

10 『三輔黃圖』卷五臺榭「漸臺，在未央宮太液池中，高十丈。漸，浸也，言爲池水所漸。又一説，漸臺星名，法星以爲臺名。未央宮有滄池，池中有漸臺。」但し「未央宮太液池」は「建章宮太液池」の誤り。

漸台は未央宮滄池と建章宮太液池の二箇所にあつた。建章宮は武帝によつて造営された。文帝は未

央宮滄池中の漸台で鄧通を採しあてた。

11 『漢書』賈鄼枚路傳「賈山、潁川人也。孝文時、言治亂之道、借秦爲諭、名曰至言。其辭曰：今方正之士皆在朝廷矣、又選其賢者使爲常侍諸吏、與之馳毆射獵、一日再三出。臣恐朝廷之解弛、百官之墮於事也、諸侯聞之、又必怠於政矣。今從蒙俊之臣、方正之士、直與之日日獵射、擊兔伐狐、以傷大業、絕天下之望、臣竊悼之。大臣不得與宴游、方正修潔之士不得從射獵、使皆務其方以高其節、則群臣莫敢不正身修行、盡心以稱大禮。」

12 『漢書』賈誼傳「誼數上疏陳政事、多所欲匡建、其大略曰：夫射獵之娛、與安危之機孰急。今不獵猛敵而獵田彘、不搏反寇而搏畜兔、翫細娛而不圖大患、非所以爲安也。」賈誼がこの上諫をしたのは太中大夫の時ではなく、長沙から呼び戻されて梁の懷王の太傅になった時である。

13 賈誼傳「賈誼、雒陽人也。文帝初立、召以爲博士。是時、誼年二十餘歲、最爲少。超遷、歲中至太中大夫。天子議以誼任公卿之位。絳、灌、東陽侯、馮敬之屬害之、乃毀誼曰雒陽之人年少初學、專欲擅權、紛亂諸事。於是天子後亦疏之、不用其議、以誼爲長沙太傅。」賈誼を諍ったのは周勃、

灌嬰、張相如、馮敬らであつて、鄧通のことは言つてない。

14 賈誼傳は「閹茸尊顯兮、讒諛得志」に作る。師古曰「閹茸、下材不肖之人也。」

〔訓読〕

上曰く「吾朝に臨み政を統べ號令を施すに於てや何如ん。」向未だ對ふるに及ばざるに、上向に謂ふ、「校尉帝の師傅、耆舊治聞にして、親しく先帝に事へ、三世の得失を歴見す。事善惡無く、如し之を聞知すれば、其の言隱す所有る勿かれ」と。向曰く「文帝の時政頗る遺失するも、皆所謂悔慙小疵なるか。嘗て輦にて郎署に過り、中郎の馮唐に問ふに趙將の廉頗・馬服を以てす。唐言ふ、『今此の人有り』と雖も、用ひる能はざるなり」と。輦を推して去り、禁中に還歸して、召して唐を責讓す。唐頓首して陳べて言ふ、『之を祖父に聞けり、道ふらく、廉頗・李牧邊將爲りて、市租諸入皆莫府に輸す。而して趙王多少を問はず。日に牛を撃ち酒を灑ぎ、勞ひて士大夫に賜ひ、賞異なるに故有り、能く威名を立つ、と。今臣竊かに聞く、雲中太守魏尚は、邊の良將なり。匈奴常に塞を犯し寇を爲す。尚之を追ひ、吏士爭ひて前に居り、樂みて死力を盡す。

斬首上功するに、誤差數級あれば、之を吏に下し、尙竟に罪に抵る、と。是に由りて之を言へば、廉頗・李牧を得ると雖も、用ひる能はざるなり」と。河東太守季布、郡を治めて聲有るに及び、召して以て御史大夫と爲さんと欲す。左右或ひは毀りて使酒なりと言ひ、後用ひられず。布辭去せさせられ、自ら陳べて曰く、『臣幸に罪を河東に待つを得、故無くして徵召せらる。此れ人に必ず臣を以て國を欺く者有らん。既にして到れば用ひる無し。此れ人に亦た以て臣を毀傷する者有らん。今一人の言を以て則ち之を進め、一人の言を以て則ち之を退く。臣天下に以て朝廷の短を見はすもの有るを恐るるなり』と。上に慚色有り。卒に布をして官に之かしむ。太中大夫鄧通に及びては佞幸を以て癰瘍の膿汁を吮^{すず}りて愛せられ、至親に擬へ、賜るに蜀郡の銅山を以てし、鑄錢を得さしむ。通の私家の富、王者封君に侔^なし。又微行を爲し、數しば通の家に幸す。文帝代服し罽^かを衣し、氍毹^こを襲^{かぶ}り、駿馬に騎り、侍中・近臣・常侍・期門の武騎を從へて漸臺の下に獵し、馳せて狐兔を射、雉^いを果し、麋^いを刺す。是の時、待詔の賈山諫めて、以て宜しく數しば郡國の賢良の吏を從へて出でて遊獵すべからずと爲し、此の人をして名に負き其の與に稱^なはざらしむるを重んず。太中大

夫賈誼に及び亦た數しば遊獵を止むを陳ぶ。是の時、誼と鄧通とは俱に侍中の同位にして、誼又通の人と爲りを惡み、數しば廷にて之を議る。是に由り疏遠せられ、遷されて長沙太傅と爲る。既に官に之き、内に自得せず。湘水を渡るに及び、帛書を投じて曰く『閹茸尊顯、佞諛意を得』と。以て屈原の讒邪の咎^かに離るを哀れみ、亦た因りて自ら鄧通等の愆^{とが}ふる所と爲るを傷むなり」と。

〔現代語訳〕

成帝が「私は朝廷に臨んで政治を統制し命令を発するにおいてはどうか」と問われた。劉向が答える前に、帝は劉向に「校尉^{あな}は私の師であり、長老で博聞である。そして先代の宣帝、元帝にも仕え、三代の政治の善し惡しを見ている。事の善惡に関係なく見聞きして知っているとおり隠すことなく言うように」と云われた。劉向は答えた。「文帝の時代、政治はやや失敗がありました、どれも小さな過失といえましよう。かつて文帝は輦車に乗って郎官の役所に立ち寄り、中郎の馮唐に戦国末の趙の將、廉頗と馬服君趙奢のことを聞かれました。馮唐は『今この人たちがいても陛下は任用することはできないでしょう』と云いました。帝は輦車をすすめて宮中に帰り、馮唐を召しだ

して叱責されました。馮唐は叩頭して申し上げました。
『かように祖父が語るのを聞いたことがございます。』

廉頗と李牧が辺境の將軍となると、市場の租税などの収入はみな將軍の幕府に入れたが、趙王はそれがいくらかは聞かなかった。毎日牛をさばいて酒をふるまい、士卒たちを勞い、手柄には適切に手厚い褒賞を施したので、匈奴を追い払うという功績を立てることができた、と。今私はこんな話を耳にしました。雲中太守の魏尚は辺境守備の良將で、匈奴がいつも塞を襲い略奪をしていたのを追い払った。彼の士卒たちは先を争って、喜んで死力を尽くしたが、敵の斬首の数を報告するのにくらかの間違ひがあり、それが担当の役人に報告され魏尚は罪に当てられた、ということです。このことから考えますと、廉頗と李牧を今手に入れられても任用されることはできないでしょう』と。河東太守の季布は、郡に善政をしいて名声が揚がると、朝廷に召しだされ御史大夫に任命されることになりました。しかし文帝の側近に彼は酒乱であると謗つたものがいたため沙汰止みになりました。季布は河東に退去させられることになり、自ら『私は幸い河東で成果が上がらずお叱りを蒙るのを待つておりましたが、ゆえなく召しだされることになりました。きっと私に能力

があるとお上を騙すものがいたからでございましょう。しかし朝廷に参りましたら任用の話はなくなりまして。これもやはり私を謗るものがいたからでございましょう。今一人の推薦のことで任用し、一人の排斥のことで退ける。わたくしはこの為に朝廷を批判するものがでるのではと恐れます』と申し上げました。文帝は恥じるふうがありました。結局季布を任地の河東に帰らせました。佞幸の臣であつた太中大夫鄧通は文帝のできものの膿をすすって愛されました。文帝は鄧通の自分に対する愛は最も近い肉親である太子に劣らないと思い、鄧通に蜀郡の銅山を賜り銅錢の鑄造を許されたので、鄧通の家の財産は王侯にも等しくなりました。またしばしばお忍びで鄧通の家を訪れました。文帝は胡服のような代国の服や毛氈の服と帽子を着用し、駿馬に乗り、侍中や側近、常侍、期門の護衛兵たちを従えて未央宮の池中の漸台の下に繰り出して獵をし、駆け回つて狐やウサギを射、雉を殺し猪子を突き刺していました。この時、待詔の賈山は遊獵をやめるよう諫言し、政に参与するために選ばれた人々を狩獵に連れ出すことによつて彼らの名望を損なうことを重大視しました。太中大夫の賈誼もまたしばしば遊獵をやめるよう陳べました。この時賈誼は鄧通とともに

に侍中の同位で、鄧通の人柄を嫌っていたので、しばしば朝廷で彼を批判しました。そのため文帝に疎まれ遠ざけられ、長沙太傅に左遷されました。任地に赴くことになり彼は不満を抱いており、湘水をわたるとき屈原を弔う文を作り『下劣な人間が高位に着き、媚び諂う者が思うように生きている』と述べました。屈原が讒言に陥れたことを哀れむとともに、自ら鄧通らに訴えられたことを傷んだのです。」

成帝曰：「其治天下孰與孝宣皇帝。」向曰：「中宗之世，政教明，法令行，邊境安，四夷親，單于款塞，天下殷富，百姓康樂，其治過於太宗之時。亦以遭遇匈奴賓服，四夷和親也。」

上曰：「後世皆言文帝治天下幾至太平，其德比周成王，此語何從生。」向對曰：「生於言事。文帝禮言事者，不傷其意，群臣無小大，至即便從容言，上止輦聽之，其言可者稱善，不可者喜笑而已。」言事多褒之，後人見遺文，則以爲然。世之毀譽，莫能得實，審形者少，隨聲者多，或至以無爲有。故曰堯、舜不勝其善，桀、紂不勝其惡。桀、紂非殺父與君也，而世有殺君父者，人皆言無道如桀、紂，此不勝其惡故。故若文帝之仁賢，

不勝其善，世俗褒揚，言其德比成王，治幾太平也。然文帝之節儉約身以率先天下，忍容言者，含咽臣子之短，此亦通人難及，似出於孝宣皇帝者也。如其聰明遠識，不忘數十年事，制持萬機，天資治理之材，恐文帝亦且不及孝宣皇帝。向以爲如此。及至世間言文帝小生於軍中，長大祭代東門外，使者求得之，因立爲代王；徵當即位，後期，日爲之再中；集上書囊以爲前殿帷，常居明光宮聽政，爲薄太后持三年服，治天下致升平，斷獄三百人，粟一升一錢，凡此十餘事，皆俗人所妄傳，言過其實及傳會，或以爲前皆非是。」如劉向言。

〔注〕

1 『漢書』宣帝紀「甘露二年冬十二月匈奴呼韓邪單于款五原塞，願奉國珍朝三年正月。」師古曰「款，叩也。」

2 『漢書』爰盎傳「盎曰陛下從代來，每朝，郎官者上書疏，未嘗不止輦受。其言不可用，置之，言可采，未嘗不稱善。何也，欲以致天下賢英士大夫，日聞所不聞，以益聖。」

3 正失篇序「孟軻云堯、舜不勝其美，桀、紂不勝其惡。」

〔訓詁〕

成帝曰く「其の天下を治むるは孝宣皇帝と孰いづれ與ぞ。」

向曰く「中宗の世、政教明るく、法令行はれ、邊境安く、四夷親しみ、單于塞を款^たき、天下殷富し、百姓康樂し、其の治太宗の時に過ぐ。亦た以て匈奴賓服し、四夷和親するに遭遇するなり。」

上曰く「後世皆言ふ、文帝天下を治め幾ど太平に至り、其の徳周の成王に比ぶと。此の語何く従り生ず」と。向對へて曰く「言事より生ず。文帝事を言ふ者を禮し、其の意を傷めざれば、群臣小大無く、即便ち從容として言ふに至る。上輩を止めて之を聽き、其の言可き者は稱善し、可からざる者は喜笑するのみ。事を言ふもの多く之を褒むれば、後人遺文を見て、則ち以て然りと爲す。世の毀譽、能く實を得る莫く、形を審らかにする者少く、聲に隨ふ者多ければ、或ひは無きを以て有りと爲すに至る。故に曰く『堯舜其の善に勝へず、桀紂其惡に勝へず』と。桀紂父と君とを殺すに非ざるなり、而して世に君父を殺す者有らば、人皆無道なること桀紂の如しとす。此れ其の惡に勝へざる故なり。故に文帝の仁賢の若きは、其の善に勝へず、世俗褒揚し、其の徳成王に比び、治太平に幾しと言ふなり。然れども文帝の節儉約身し以て天下に率先し、言ふ者を忍容し、臣子の短を含咽するは、此れ亦た通人も及び難く、孝宣皇帝に出づる者に似たるなり。其の

聰明遠識、數十年の事を忘れず、萬機を制持するが如きは、天資治理の材にして、恐らく文帝は亦た孝宣皇帝に及ざるに^{ちが}し。向以て此くの如しと爲す。世間の『文帝小くして軍中に生ひ、長大して代の東門の外に祭る。使者求めて之を得、因りて立てて代王と爲し、徴され當に即位すべきに、期に後れ、日之が爲に再び中す。上書の囊を集めて以て前殿の帷と爲し、常に明光宮に居りて聽政し、薄太后の爲に三年の服を持し、天下を治めて升平を致し、斷獄三百人、粟一升一錢』と言ふに至るに及びては、凡そ此十餘事、皆俗人の妄りに傳へる所にして、言其の實を過ぎ傳會に及ぶ。或ひは以て前に皆是に非ずと爲す」と。劉向の言ふが如し。

〔現代語訳〕

成帝が「天下を治めることでは文帝と宣帝とではどちらが優れているだろうか」と問うと、劉向は答えた。「中宗（宣帝）の時代は、政治教化は適切に行われて法令も遵守され、辺境地帯も平穩、四方の蛮族は友好的で、匈奴の單于は臣従を求めて辺塞の門を叩きにきました。天下は富み榮え、人民は安樂に暮らしましたので、その治政は太宗（文帝）の時代より優れていましたし、また匈奴が来朝服従し、四方の蛮族が和睦する

ときに巡り合わせました。」

成帝が「後世の人々は皆、文帝の治政によって天下はほとんど太平の世に近づき、その徳は周の成王に並ぶというが、この言葉はどこから生まれたものか」と問うと、劉向は答えた。「政事への進言諫言を受け入れたことから生まれました。文帝は進言するものを礼遇し、彼らの志を傷つけませんでした。群臣たちは地位の高低に関らず、心置きなく進言しました。帝は輦車を止めて彼らの進言を聴き、その意見が良ければ称賛し、良くなければ笑って収めました。進言する者たちの多くがこの姿勢を褒めましたので、後世の人々がこれらのことについて書き残された文章を見て、そう思ったのです。世間での毀誉は実情を言い当てているものではなく、事実を確かめる者はほとんどおらず、評判を鵜呑みにする者が多いので、無かったものがあったことになってしまふのです。だから『堯舜ほど善いものではなく、桀紂ほど悪いものはない』と云う言葉があるのです。夏の桀王と殷の紂王は父と主君を殺したわけではありませんが、世間で誰か父と主君を殺すと、人々は皆その人のことを桀紂のように無道だ、と言います。それは桀紂ほど悪いものはいないからです。ですから文帝の仁賢もそれに勝るものはないとされ、

その徳は周の成王に並び、その治世は太平の世に近い、と言われるのです。とはいえ、文帝が天下に率先して儉約し身を慎しみ、忍んで進言諫言を受容し、自分の臣下や子の短所を飲み込んで荒立てることをしなかったのは、やはり治政に通じた人でもまねでせず、宣帝より優っていると思われます。宣帝の聡明で先のことを見通し、過去数十年のことも忘れず、天下の重要事項を決定する力は、天賦の治政の才というもので、恐らく文帝は宣帝にかなわないでしょう。私向はこのように思います。世間で『文帝は子供のころ軍中で育ち、成長してから代の城の東門の外で父を祭っていたところ、父高祖の使者が捜しあて代王に立てた。のち即位するために朝廷に徴され、期限に遅れたが、太陽が王のために戻って再び南中したため即位できた。上書が入れてあつた布袋を集めて前殿の帷帳を仕立て、常に明光宮に居て政務を執り、母薄皇太后のために、三年の喪に服し、天下を治めて、罪を裁いたのはたったの三百人、粟は一升一錢だった』といっています。すべてこれら十余りのことは、皆俗人がでたらめに伝え、事実を誇張し無理につなぎ合わせたもので、恐らく本当ではありませんまい。」

劉向の言うとおりである。

8 東方朔

俗言東方朔，太白星¹精，黃帝時爲風后²，堯時爲務成子³，周時爲老聃⁴，在越爲范蠡，在齊爲鴟夷子皮⁵，言其神聖能興王霸之業，變化無常。

謹接漢書：東方朔⁶，平原人也。孝武皇帝時，招延賢良文學之士，待以不次之位⁷，故四方多上書言得失自衛壽者。於是朔詣闕自陳：「十二失父，長養兄嫂。年十三學書，十四擊劍，十六誦詩，十九習孫、吳兵法。又常服子路之言⁸。臣朔年二十三，長九尺三寸，目若懸珠，齒若編貝，勇若孟賁⁹，捷如慶忌¹⁰，廉若鮑叔¹¹，信若尾生¹²。若此，可以爲天子大臣矣。」朔文辭不遜，高自稱譽，由是見偉，稍益親幸，官至太中大夫，倡優畜之，不豫國政¹³。劉向少時¹⁴數問長老賢通於事及朔時人，皆云朔口諧倡辯，不能持論，喜爲凡庸誦說，故令後世多傳聞者。而楊雄¹⁵亦以爲朔言不純師，行不純德，其流風遺書蔑如¹⁶也。然朔所以名過其實，以其恢誕多端，不名一行，應諧似優，不窮似智，正諫似直，穢德似隱。非夷、齊¹⁷，是柳惠¹⁸，其滑稽之雄乎。朔之逢占¹⁹射覆²⁰，其事浮淺，行於眾僮兒牧豎，

莫不炫耀。而後之好事者，因取奇言怪語附著之耳。安在能神聖歷世爲輔佐哉。

〔注〕

1 金星。

2 『史記』五帝本紀「黃帝：舉風后、力牧、常先、太鴻以治民。」『漢書』藝文志兵家陰陽「風后十三篇。圖二卷。黃帝臣，依託也。」同數術五行家「風后孤虛二十卷。」

3 藝文志諸子小說「務成子十一篇。稱堯問，非古語。」同數術五行「務成子災異應十四卷。」同方技房中「務成子陰道三十六卷。」『荀子』大略篇「堯學於君疇，舜學於務成昭。」『白虎通義』辟雍「帝堯師務成子，帝舜師尹壽。」

4 『史記』老子韓非列傳「老子者，楚苦縣厲鄉曲仁里人也。姓李氏，名耳，字聃，周守藏室之史也。」

5 『史記』貨殖列傳「昔者越王句踐困於會稽之上，乃用范蠡、計然。：范蠡既雪會稽之恥，：乃乘扁舟，浮於江湖，變名異姓，適齊爲鴟夷子皮，之陶爲朱公。」

6 『漢書』東方朔傳。

7 師古曰「不拘常次，言超擢也。」

8 服虔曰「無宿諾。」『論語』顏淵篇「子曰片言可以

折獄者其由也與。子路無宿諾。」何晏集解「宿，猶豫也。子路篤信，恐臨時多故，故不豫諾。」王利器は服虔注に加えて劉放と劉敞が先進篇の「可使有勇」とするのを引く。先進篇「子路率爾而對曰千乘之國，攝乎大國之間，加之以師旅，因之以饑饉。由也爲之，比及三年，可使有勇，且知方也。夫子哂之。」後者を採る。

9 師古曰「孟賁，衛人，古之勇士也。尸子說云人謂孟賁生乎，曰勇。賁乎，曰勇。富乎，曰勇。三者人之所難，而皆不足以易勇，故能攝三軍，服猛獸也。」

10 師古曰「王子慶忌也。射之，矢滿把不能中，駟馬追之不能及也。」

11 『史記』管晏列傳「管仲曰吾始困時，嘗與鮑叔賈，分財利多自與，鮑叔不以我爲貪，知我貧也。」

12 『莊子』盜跖篇「尾生與女子期於梁下，女子不來，水至不去，抱梁柱而死。」

13 東方朔傳「朔嘗至太中大夫，後常爲郎，與枚皋、郭舍人俱在左右，詼調而已。久之，朔上書陳農戰疆國之計，因自訟獨不得大官，欲求試用。其言專商鞅、韓非之語也，指意放蕩，頗復詼諧，辭數萬言，終不見用。」

14 「劉向少時」から「後之好事者，因取奇言怪語附著之耳」まで、東方朔傳の贊に拠る。

15 『法言』淵騫「世稱東方生之盛也，言不純師，行不純表，其流風遺書，蔑如也。…或問東方生名過實者何也。曰應諧、不窮、正諫、穢德、應諧似優，不窮似哲，正諫似直，穢德似隱。請問名。曰詠達。惡比。曰非夷、齊而是柳下惠，戒其子以尙容，首陽爲拙，柱下爲工，飽食安坐，以仕易農，依隱玩世，詭時不逢，其滑稽之雄乎。」

16 師古曰「言辭意淺薄，不足稱也。」

17 殷の孤竹君の子。周の武王が殷の紂王を討ったのち首陽山に隠れ餓死した。應劭曰「伯夷、叔齊不食周粟，餓死首陽山，爲拙。」

18 春秋魯の大夫展獲、字季又字禽、諡惠。食邑が柳下であつたので柳下惠と呼ばれる。『論語』微子篇「逸民，伯夷、叔齊、虞仲、夷逸、朱張、柳下惠、少連。子曰不降其志，不辱其身，伯夷、叔齊與。謂柳下惠、少連，降志辱身矣。」『孟子』萬章章句下「柳下惠不羞汙君，不辭小官，進不隱賢，必以其道，遺佚而不怨，阨窮而不憫，與鄉人處，由由然不忍去也。爾爲爾，我爲我，雖袒褐裸裎於我側，爾焉能浼我哉。故聞柳下惠之風者，鄙夫寬，薄夫

敦。」

19 『藝文類聚』 菓上李「東方朔占曰、朔與弟子俱行。

朔渴、令弟子叩道邊家門、不知室主姓名、呼不應。

朔復往、見博勞飛集其家李樹上。朔謂弟子曰、主人當姓李名博、汝呼當應。室中人果有姓李名博出、與朔相見、即入取飲與之。」

20 ふせた器の中に隠されているものを当てる術。東

方朔傳「上嘗使數家射覆、置守宮孟下、射之、皆不能中。朔自贊曰臣嘗受易、請射之。乃別著布卦而對曰、臣以爲龍又無角、謂之爲蛇又有足、跂跂脈脈善緣壁、是非守宮即蜥蜴。上曰善。賜帛十匹。復使射他物、連中、輒賜帛。」

〔訓読〕

俗に言ふ、東方朔太白星の精にして、黃帝の時風后爲り、堯の時務成子爲り、周の時老聃爲り、越に在りて范蠡爲り、齊に在りて騶夷子皮爲り、と。言ふ、其の神聖能く王霸の業を興し、變化無常なり、と。

謹んで按ずるに、漢書にいふ、東方朔、平原の人なり。孝武皇帝の時、賢良文學の士を招延し、待するに不次の位を以てす。故に四方上書して得失を言ひ自ら銜鸞する者多し。是に於て朔闕に詣り自ら陳ぶ、「十二にして父を失ひ、兄嫂に長養さる。年十三にして書

を學び、十四にして擊劍し、十六にして詩を誦し、十九にして孫・吳の兵法を習ふ。又常に子路の言に服す。臣朔年二十三、長九尺三寸、目は珠を懸けたるが若く、齒は貝を編むが若し。勇は孟賁の若く、捷は慶忌の若く、廉は鮑叔の如く、信は尾生の若し。此くの若きなれば、以て天子の大臣爲るべし」と。朔文辭不遜、高く自ら稱譽す。是れに由り倖とせられ、稍益ます親幸せらる。官太中大夫に至るも、倡優として之を畜い、國政に豫らず。劉向少時、數しば長老の事に賢通し朔の時に及ぶ人に問へば、皆、朔口諧倡辯なるも、論を持す能はず、凡庸の爲に誦説するを喜ぶ、故に後世をして傳聞する者を多からしむ、と云ふ。而して楊雄亦以爲へらく、朔言は師を純もつぱらにせず、行ひは德を純にせず、其の流風遺書蔑如たるなり。然るに朔名其の實に過ぐる所以は、其の恢誕多端、一行に名せず、應諧すること優に似、窮せざること智に似、正諫すること直に似、穢德隱に似るを以てなり。夷・齊を非とし、柳惠を是とす。其れ滑稽の雄か、と。朔の逢占射覆、其の事浮淺なれば、眾僮兒牧豎に行なわれ、炫耀されざるなし。而して後の事を好む者困りて奇言怪語を取り之に附著するのみ、と。安ぞ能く神聖にして歷世に輔佐爲ること在らんや。

〔現代語訳〕

俗世間では、東方朔は太白金星の精で、黄帝に仕えた風后であり、堯の時はその師であつた務成子であり、周の時は老子、越では句踐に仕えた范蠡であり、その後斉に移つて鷗夷子皮と名乗つた、と言われている。また、彼の能力は神聖で霸王の業を補佐することができ、常に姿を変えて一定しない、と言われる。

謹んで考究いたします。

『漢書』東方朔伝に次のように云う、「東方朔は平原郡の人である。孝武皇帝の時、賢良の士と文学の士を朝廷に招き、通常の順序に関らず拔擢することになった。そのため、全国の多くの士が帝に政策を論じる文書を奉り、自分のことを誇大に言い立てて売り込んだ。そこで朔も都に上り自薦の文書を奉り『十二歳で父を亡くし、兄夫婦に養育されました。十三の年に書物を学び始め、十四で剣を学び、十六で詩をそらんじ、十九で孫子と呉起の兵法を学びました。また常に子路の政治への抱負に感服しております。臣朔は現在年二十三で、身の丈九尺三寸（約二二〇センチメートル）、目は真珠を懸けたように、齒は貝を編んだように美しく、孟賁のように勇敢で、慶忌のようにすばやく、鮑叔のように清廉で、尾生のように信義を重んじます。

このようにございますので天子の大臣としてお仕えることができましょう」と述べた。朔の文章は不遜で自分のことを高く褒め上げていた。そのため帝は優れた人物と評価し、だんだんと身近に置き可愛がった。官は太中大夫にまで上つたが、帝は俳優として傍におくだけで、国政には関与できなかった。また賛には以下のような劉向の言葉が載せられている。「私は若いころ、物事によく通曉した長老で朔と時を同じくした人たちにしばしば尋ねたことがあつたが、皆『朔は諧謔がうまく能弁であつたが、しっかりと主張を保つことができなかった。しかし凡俗のために故事を伝え解説するのが好きだつたため、後世に彼の言行を伝えるものが多いのです』と言つていた。そして揚雄も、『朔は、言論は雑多な学問を取り入れ、行動も常に徳に則つていたわけではなかつたので、彼の後世への影響や遺著は浅薄で取るに足りないものだ。それなのに実際以上に名声が高いのは、その諧謔が自在で、一つの評価で納まりきるものでないからだ。すなわち、しやれの効いた応対は俳優のようであり、窮することがないのは智者のようであり、真直ぐに帝に諫言したことは正^{せいぢよく}直^{ちよく}の臣のようであり、行いを慎まなかつたことでは隠者のようであつたのからだ。彼は義のため

に餓死した伯夷・叔斉の生き方を否定し、汚君に仕えて恥としなかった柳下惠の生き方を肯定した。まさしく滑稽の雄なのだ』と評している。朔の占いや射覆^{やてもろ}は、あさはかなことなので、多くの子供や牧童たちに伝え広がり、みな眩惑されてしまった。そこで後世の好事家が奇怪なことがあるとそれを取り上げて皆彼に仮託したのだ。」

そのような東方朔がどうして神聖で歴代の帝王の輔佐になるようなことができたのか。

8 淮南王安神仙

俗説淮南王安¹招致賓客方術之士數千人²，作鴻寶苑祕枕中之書，鑄成黃白³，白日升天⁴。

謹按漢書：淮南王安天資辨博，善爲文辭，孝武以屬諸父，甚尊之。招募方伎怪迂之人，述神仙黃白之事⁵，財殫力屈，無能成獲。乃謀叛逆，剋皇帝璽，丞相、將軍、大夫已下印，漢使符節法冠⁶。趙王彭祖⁷、列侯讓⁸等議曰：「安廢法，行邪僻，詐僞心，以亂天下，營惑百姓，背叛宗廟。春秋『無將，將而必誅』。安罪重於將，反形已定，圖書印及他逆無道事驗明白。」

丞相弘、廷尉湯¹⁰以聞，上使宗正以符節治王。王安自殺，太子諸所與謀皆收夷。國除爲九江郡¹¹。親伏白刃，與眾棄之，安在其能神仙乎。安所養士或頗漏亡，恥其如此，因飾詐說。後人吠聲，遂傳行耳。

〔注〕

1 高祖の孫。父淮南厲王劉長は高祖の少子で、文帝の時謀反のため蜀に護送される途中絶食して死んだ。長子劉安が第二人とともに父の封国を三分して継いだ。謀反が発覚して自殺した。『史記』『漢書』に伝有り。

2 注5参照。

3 『漢書』楚元王傳「向字子政，本名更生。：宣帝循武帝故事，招選名儒俊材置左右。更生以通達能屬文辭，與王褒、張子僑等並進對，獻賦頌凡數十篇。上復興神僊方術之事，而淮南有枕中鴻寶苑祕書。書言神僊使鬼物爲金之術，即鄒衍重道延命方，世人莫見，而更生父德武帝時治淮南獄得其書。更生幼而讀誦，以爲奇，獻之，言黃金可成。」

4 『論衡』道虛篇「儒書言：淮南王學道，招會天下有道之人，傾一國之尊，下道術之士。是以道術之士，並會淮南，奇方異術，莫不爭出。王遂得道，學家升天，畜產皆仙，犬吠於天上，雞鳴於雲中。此言

仙藥有餘，犬雞食之，並隨王而升天也。」

- 5 『漢書』淮南衡山濟北王傳「淮南王安爲人好書，鼓琴，不喜弋獵狗馬馳騁，亦欲以行陰德拊循百姓，流名譽。招致賓客方術之士數千人，作爲內書二十一篇，外書甚衆，又有中篇八卷，言神仙黃白之術，亦二十餘萬言。時武帝方好藝文，以安屬爲諸父，辯博善爲文辭，甚尊重之。」

- 6 淮南衡山濟北王傳「於是王銳欲發，乃令官奴入宮中，作皇帝璽，丞相、御史大夫、將軍、吏中二千石、都官令、丞印，及旁近郡太守、都尉印，漢使節法冠。」師古曰「法冠，御史冠也。本楚王冠，秦滅楚，以其君冠賜御史。」

- 7 『漢書』景十三王傳に伝有り。法を盾に身を守り、他人を誣告して罪に陥れることが多かった。

- 8 小竹武夫訳『漢書』注は「曹參の玄孫曹談か」という。

- 9 『春秋公羊傳』昭公元年傳「今將爾，詞曷爲與親弑者同。君親無將，將而必誅焉。」

- 10 公孫弘と張湯。ともに『漢書』に伝有り。

- 11 淮南衡山濟北王傳「趙王彭祖、列侯讓等四十三人皆曰淮南王安大逆無道，謀反明白，當伏誅。膠西王端議曰安廢法度，行邪辟，有詐僞心，以亂天下，

營惑百姓，背畔宗廟，妄作妖言。春秋曰臣毋將，將而誅。安罪重於將，謀反形已定。臣端所見其書印圖及它逆亡道事驗明白，當伏法。丞相弘、廷尉湯等以聞，上使宗正以符節治王。未至，安自殺。后、太子諸所與謀皆收夷。國除爲九江郡。」

〔訓読〕

俗説にいふ、淮南王安賓客方術の士數千人を招致し、鴻寶苑秘枕中の書を作り、黃白を鑄成し、白日升天す、と。

謹んで按ずるに、漢書にいふ、淮南王安天寶辨博、善く文辭を爲し、孝武諸父に屬するを以て、甚だ之を尊ぶ。方伎怪迂の人を招募し、神仙黃白の事を述べ、財殫き力屈し、能く成獲すること無し。乃ち叛逆を謀り、皇帝の璽、丞相・將軍・大夫已下の印を剋し、漢の使の符節法冠あり。趙王彭祖・列侯讓等議して曰く、「安法を廢し、邪僻を行ひ、詐僞の心、以て天下を亂し、百姓を營惑し、宗廟に背叛す。春秋に『將にせんとすは無く、將にせんとすれば而して必ず誅す』といふ。安の罪將にせんとするより重く、反の形已に定まる。圖書印及び他の逆無道の事の驗し明白なり」と。丞相の弘・廷尉の湯以て聞す。上宗正をして符節を以て王を治めしむ。安自殺し、太子と諸の謀に與る所皆

收め夷ぎ、國除かれ九江郡と爲る、と。親ら白刃に伏し、衆と與に之を棄つるに、安んぞ其の能く神仙たることとらんや。安の養ふ所の士、或ひは頗漏れ亡げ、其の此くの如きを恥ぢ、因りて飾りて詐説す。後人の吠聲、遂に傳へ行はるのみ。

〔現代語訳〕

俗説に、淮南王劉安は賓客や方術の士を數千人招致し、「鴻宝苑秘」という枕中秘藏の書をつくり、金銀を鑄造し、白昼に天に昇った、という。

謹んで考究いたします。

『漢書』に次のように書かれている。「淮南王劉安は、天性能弁博學で、文章の才能があつた。武帝は、彼が父の世代に当たるのでたいそう尊重していた。方術や怪しい技を使う人々を招き寄せ、神仙になることや金銀の鑄造を試みて、財力も氣力も使い果たしたのに、何の成果も上げられなかった。そこで反逆を謀り、皇帝の玉璽、丞相、將軍、大夫以下の印、漢の使者の割符手形、御史の冠などを偽造した。趙王劉彭祖と列侯の讓らが彼の罪を議論して言つた。『安は法を廢し、邪惡を行い、世の中を欺く心を懷き、天下を亂し、人民を惑わし、宗廟に叛きました。春秋に「弑逆未遂は無い。未遂であつても必ず誅殺する」とあります。安

の罪は未遂より重く、謀反の形はすでに定まつております。文書や印璽の偽造やその他の大逆無道の証拠は明白であります。』丞相の公孫弘と廷尉の張湯はこれを帝に奏上した。帝は宗正に天子の割符を持たせて淮南王安を逮捕させたが、その前に安は自殺した。淮南王の太子と、共謀した者たちはみな逮捕され処刑された。淮南国は取り潰され九江郡となつた。」

淮南王安は自ら白刃で命を絶ち、他の大勢の仲間とともに市に棄てられたのに、どうして神仙となつて升天することができようか。おそらく安が養つていた食客のうち罪を逃れることのできた者たちが、このような結末になつたのを恥じて、安の最期を粉飾してでたらめを言つただけだろう。それを後世の人々が吠え立ててそれが伝わっただけなのだ。